

ネガティブな予言は当たりやすいか？

高橋莉紗 山崎瑞紀

本研究では、運勢占いではネガティブな予言の方が「的中した」と判断されやすいというネガティブティ・バイアスがみられるか、について女子大学生42名を対象に実験を行い、検討した。星座占い文章の各記述をネガティブな内容とポジティブな内容に分類した上で、各記述が当たったかどうかを1週間後に判断してもらった結果、ネガティブな占いの方が的中したと判断されやすい傾向のあることが示唆された。全体としてネガティブな内容の方がポジティブな内容の記述よりも多く想起されていたことから、これらの過程にはネガティブな記述の記憶しやすさが関わっていると考えられる。こうした傾向は、占いへの信用の高低に関わらずみられた。

キーワード：占い、予言、ネガティブティ・バイアス、記憶

1 はじめに

占いブームである。女性誌や情報誌に星座占いが掲載されるだけでなく、毎朝のテレビ番組でも「今日の運勢」が欠かさず放送されている。

[2]は、運勢占いが読み手に「的中した」と判断される理由を調べるため、雑誌の占い文章を用いて、占いの内容（ポジティブ・ネガティブ）、占いへの信用度、運勢の対象期間（1週間、3週間）の各要因と占いが「的中した」と思う度合いの関連を検討した。結果として、占いへの信用度の高い群ではネガティブな占いが「的中した」と判断される傾向のあること、対象期間による中程度の差はみられないことを見出している。また、占い文章のうち「的中した」と実験参加者が思う記述箇所にラインを引いてもらい、記述箇所の分析を行った結果、ネガティブな記述の割合は55.9%であり、占い文章全体に占めるネガティブな記述の割合（26.6%）を大きく上回っていた。同様の傾向は「的中しそう」な記述箇所の分析でも見出された。

[2]が指摘するように、ポジティブな内容が「的中している」と受け取られやすい性格判断とは異なり[1]、運勢占いではネガティブな予言の方が「的中した」と判断されやすい傾向がみられるとすれば、それはなぜだろうか。1つの解釈として、ネガティブな情報の方が重視されやすく判断に影響を及ぼしやすいというネガティブティ・バイアスの存在が考えられる。したがって本研究では、[2]による実験を参考にしながら、占いの的中判

断と占いへの信用度、記憶の関係を検討する。

具体的には、以下の2つの仮説を検討する。

- 1) 運勢占いではネガティブな方向の記述内容の方が人は記憶しやすく、そのため「的中した」と判断されやすいだろう。
- 2) 占いを信用している人ほど、1週間後でも占いの内容を記憶しているため、1)の仮説はあてはまりやすいだろう。

2 方法

実験参加者 女子大学生42名（平均年齢20.2歳、SD=1.10）。全員が2つのセッションに参加した。

手続き まず第1セッションとして、隔週刊テレビ情報誌の星座占いの文章（1頁）をコピーし、当該雑誌名を添えて実験参加者に配布した。参加者には、自分の誕生日に応じて12星座のいずれかの文章を読み、どの程度占いが当たるかの検証をしてもらいたいと教示した。その後、参加者はいくつかの質問項目に回答した。配布した占い文章は回収しなかった。1週間後の第2セッションでは、どのような1週間だったか、占いの記述内容について覚えていることは何か、占いは当たったか、どのような出来事があって占いが当たったと思ったか、等について尋ねた。いずれのセッションとも、実験に要した時間は約10分だった。

なお、星座ごとの占い文章は内容ごとに短く区切って書き出し（記述数平均10.3個）、それぞれの記述がポジティブな内容、ネガティブな内容、中立的な内容のいずれにあたるか、第一著者を含む計3名であらかじめ分類しておいた（「かなり厳しい運気に入っていく」→ネガティブ、「ラッキーカラーは白」→ポジティブなど）。分類が一致しなかったものは話し合ってから決めた。ネガティブ

TAKAHASHI Risa

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科4年生

YAMAZAKI Mizuki

東京都市大学環境情報学部情報メディア学科准教授

な記述とポジティブな記述の割合は星座によって異なるが、全体としてネガティブな記述は平均4.6個、ポジティブな記述は平均5.2個、中立的な記述は平均0.8個であり、多少ポジティブな記述が多いものの、ポジティブな記述とネガティブな記述の数はほぼ等しかった。

指標 第1セッション：①この占いが的中すると思う度合い1項目（「当たると思う（5点）」～「当たらないと思う（1点）」の5件法）、②普段占いを信じているか1項目（「信じている（5点）」～「信じていない（1点）」の5件法）、③普段どの程度占いを見ているか1項目（「よく見る（4点）」～「全く見ない（1点）」の4件法）の計3項目。その他、誕生日、星座、氏名のイニシャルを記述してもらった。

第2セッション：①該当週の運勢のよしあし1項目（「良い（5点）」～「悪い（1点）」の5件法）、②配布された占いの記述内容のうち、覚えている内容の自由記述、③配布した占いの的中度1項目（「当たった（5点）」～「当たらなかった（1点）」の5件法）、④配布した占いを該当週にどの程度見たか（「0回」、「1、2回」、「3回以上」の3件法）、⑤占いの内容を参考にしたか（「非常に参考にした（5点）」～「全く参考にしなかった（1点）」の5件法）、⑥また、占い文章の各記述についての的中したかどうか判断してもらい（「当たった」、「当たらなかった」の2件法）、的中した場合には、実際にどのような出来事があったか、具体的な内容を自由記述で回答してもらった。さらに、その出来事はポジティブなものか、ネガティブなものか、についても回答を求めた（「良かった」、「悪かった」、「良くもあるし悪くもある（両方）」、「どちらでもない」のいずれかを選択）。最後に、年齢と氏名のイニシャルを記述してもらった。

3 結果

3.1 「的中した」と判断した記述内容

参加者全体では第2セッションに行った該当週の運勢の平均値は3.36であり、多少ポジティブな方向であるものの、ポジティブーネガティブのどちらかへの大きな偏りはなかった。

第2セッションで占い文章の各記述について判断してもらった的中度について、ポジティブな記述、ネガティブな記述ごとに、参加者全体の平均を算出した（図1）。的中度は、例えばポジティブな記述の場合、ポジティブな占いの記述のうち、「当たった」と参加者が回答した記述の個数をポジティブな記述の個数で除して求めた。この的中度は比率であるため角変換した後、ポジティブな記述とネガティブな記述の平均に差があるか検討するため t 検定（片側検定）を行ったところ、ネガティブな記述の方がポジティブな記述よりも有意に高かった ($t(41)$

$=-1.95, p<.05$)。なお、各記述が的中した場合、実際に起きた出来事がポジティブなものか、ネガティブなものかを参加者に評定してもらったが、それらの判断は著者らによる分類とほぼ一致していた。

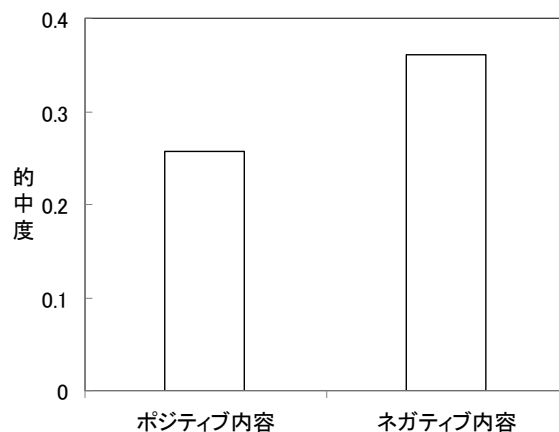


図1 占いの的中度の比較

3.2 占いへの信用度と的中判断の関係

普段の占いに対する信用度の平均 (3.17) を境に、信用高群 (28名)、信用低群 (14名) に参加者を分類し、配布した占いの全体としての的中度について、第2セッションでの自己評定項目（「当たった（5点）」～「当たらなかった（1点）」の5件法）の平均を比較したところ、信用の高低による差はみられなかった（高群：2.43、低群：2.29, $t(40) = 0.48, p>.05$ ）。

また、第2セッションで占い文章の各記述について判断してもらった的中度についても、信用高群と信用低群の平均に有意差はみられなかった（高群：0.31、低群：0.27, $t(40) = 0.58, p>.05$ ）。さらにポジティブな記述、ネガティブな記述ごとに、信用高群と信用低群の的中度の平均を出したところ、図2のようになった。信用高群、信用低群ともに、ネガティブな記述の方が的中したと判断している。角変換した値を用いて、2（占いへの信用：

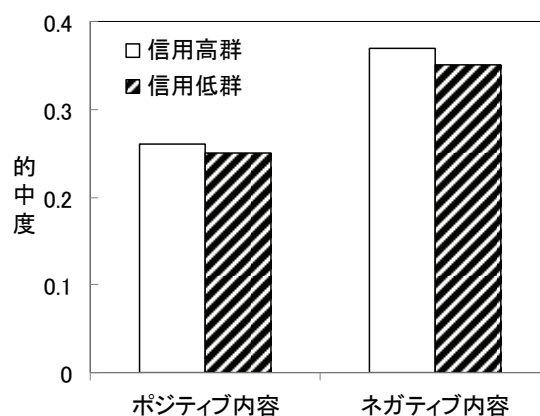


図2 占いへの信用度と的中度の関係

高/低) × 2 (占いの記述内容: ポジティブ/ネガティブ) の分散分析を行ったところ, 占いの記述内容 (ポジティブ/ネガティブ) の主効果のみ有意傾向だった ($F(1, 80)=3.14, p<.1$).

3.3 想起された内容

配布した占いの記述内容をどれだけ覚えているか, 想起された自由記述(第2セッション)を採点したところ, 全体の3分の2の人が何かしらの記述をしていたが, 全体としてネガティブな内容の記述がポジティブな内容の記述よりも多く, ほぼ倍であった(ネガティブ: 27個 > ポジティブ: 14個). また, 信用高群の方が信用低群よりも多く想起していた(高群: 1.5個 > 低群: 0.93個). 注意日やラッキーカラーなど短く書き出されているものが多く記述されている傾向があった.

4 考察

本研究では, 占い文章の各記述をネガティブな内容とポジティブな内容に分類した上で, 各記述が当たったかどうかを1週間後に判断してもらった結果, 人はネガティブな占いの方を的中したと判断しやすい傾向のあることが示唆された. 全体としてネガティブな内容の方がポジティブな内容の記述よりも多く想起されていたことから, 「ネガティブな記述内容の方が人は記憶しやすく, そのため『的中した』と判断されやすい」という仮説1が支持された. ネガティブな事象が書かれていた場合には, ネガティブな事象を回避するために, 人はそれらの記述に注意を向けやすくなるのかもしれない.

ただし, 占いを信じる者の方が, 1週間後の評定で占いは「的中した」と感じやすいという顕著な傾向は本研究ではみられず, 仮説2は支持されなかった. 占いを信用している人の方がネガティブな記述により注目し記憶するというのではないのかもしれない.

ネガティブな予言が「当たった」と判断されやすいことの要因としては, 本研究で検討した記憶の側面以外に, 「起こってしまったネガティブな出来事の原因を自分自身のせいではなく, 運勢のせいになりたい」といった側面も考えられるかもしれない. こうした点については本研究では検討しておらず, 今後の課題といえる.

参考文献

- [1] Glick, P., Gottesman, D., & Jolton, J. : "The fault is not in the stars: Susceptibility of skeptics and believers in astrology to the Barnum effect", *Personality and Social Psychology Bulletin*, 15, pp.572-583, 1989
- [2] 村上幸史: "占いの予言が「的中する」とき", 社会